

保健師学生が行う HIV 感染予防啓発活動の取り組み 過程で感じた活動の意義

村上 久恵, 佐藤 裕見子, 玉井 公子, 大倉 和子

看護学部 生活支援看護学講座

【目的】 保健師コース学生による当大学の学生に対する HIV 感染予防のための啓発活動を実施する過程で、体験した現象から保健師学生の抱いた感情に注目をして、啓発活動からの学びの実態を明らかにし、今後の教育のあり方を検討する資料とする。

【研究方法】 2020 年 12 月 14 日に当大学ロビーにて保健師コース学生 10 名が、HIV、新型コロナ感染予防のため、61 名の学生へ普及啓発を行った。その後に保健師学生に対して無記名の記述式アンケート調査を行った。分析は、質的分析を行った。

【結果】 「未経験、予測のつかない事象に対する不安定な心理を自覚」「対象への配慮」「HIV 啓発活動への実施意欲」「HIV の啓発に参加を促されると応じてもらえる」「HIV の啓発に主体的に応じてもらえる」「無関心者の存在の気づき」「対象者の HIV/AIDS に関する知識不足」「HIV/AIDS 啓発活動の必要性や重要性を認識」「活動体験から得た啓発のあり方に関する学び」の 9 項目が抽出された。

【考察】 初対面の対象者に対して HIV/AIDS、コロナ感染予防の啓発活動を行うことに保健師学生の不安・心配が強く現れた。医療系の学科を有する大学において、学生の HIV/AIDS に関する知識の不足を課題と認識した保健師学生が、自分たちの啓発活動の必要性・重要性を実感した。また、啓発活動を行うに際して、グループ内の役割分担、連携が大切な点と、2 つのグループ間でも連携をしつつ活動を進めていくことでより効果が望めること。啓発の大変さ、困難さを感じつつも、企画・準備・評価まで考えて取り組む必要性を学ぶ機会になったと考える。